

## 「2度目の無観客大会～講道館7階大道場～」

前回の東京都選手権大会は2020年3月15日、初めて経験する無観客試合であった。慣れない大会運営について、その状況を当ホームページにコメントしたことを思い出す。その当時は、1年7か月後の本日の大会がまさか2度目の無観客になるとは予想もできなかった。

コロナ禍で、出場選手たちは調整に苦勞したことだろう。しかし、本大会の出場者は実力者揃いであり、各人の調整の成果は各試合に現れていた。

女子決勝戦では、児玉ひかる選手と田中志歩選手が左の合い四つで組み、児玉選手が大外刈りで技有、その後、抑え込みで優勝した。男子決勝戦では、高橋翼選手が香川大吾選手を相手に、大外刈りで技有、その後、抑え込みで優勝した。無観客ということもあり、いくつもの白熱した試合のなかで、選手の息づかいや必死に戦う姿が臨場感と緊張感を与えてくれた。

決勝戦を戦った4名には、コロナ禍でどのような工夫をしながら大会に臨んだのかを尋ねた。

児玉ひかる選手：「思うような練習ができないなか、ストレスをかけないため、お料理を作りました。牛タンシチューが得意です。」

田中志歩選手：「サイクリングをして、気分転換をしました。」

高橋 翼選手：「SEKAI NO OWARIを聴くことで、ストレス解消をしました。」

香川大吾選手：「柔道衣懸垂、一人打ち込み、鉄棒等、一人でもできることは何かを常に考えながら続けました。」

彼らの名は、プログラムの最後にある「輝ける栄光の記録」として令和3年の欄に記されることになる。

ところで、昭和25年、26年の優勝欄には、醍醐敏郎先生のお名前がある。

講道館7階大道場には、全日本選手権を2度制覇した10段の醍醐敏郎先生がいらっしやう。10月10日、95歳でお亡くなりになった。いつもその場にいるべき人が、その場にはいないことほど悲しいことはない。ここ大道場でお会いすると、いつもニコニコしながら親しく声をかけてくださったことを思い出す。

本日10月31日はハロウィーンである。ハロウィーンとは本来、日本でいうお盆のような意味合いが強い行事である。つまり、先祖の霊が返ってくる日なのだ。そうだとすれば、醍醐敏郎先生も今日1日、この大道場で観戦していたに違いない。筆者にはそう感じられた。だからこそ、本日の選手権大会が、ここ大道場で行われたことには大きな意味がある。

筆者自身、柔道を愛する人間の一人として、柔道の普及と強化に努めていきたい。醍醐敏郎先生のお姿を思い浮かべながら、一礼してから大道場を出た。

スマホには二度とかかってくることのない醍醐敏郎先生の携帯番号が登録されている。そのままにしておきたい。

(広報副委員長 大坪宏至)